建築デザイン表題

正会員　○計画太郎 *
正会員　意匠二郎 **
正会員　※建築三郎 ***

*　（株）学会設計 工学修士
**　建築大学大学院工学研究科博士課程前期
***　建築大学大学院工学研究科 教授・工博 (※ 設計指導)

Title of the Design Work

○ KEIKAKU Taro*
ISHIO Jiro**
※ KENCHIKU Saburo***

*　GAKKAI SEKEI Co.LTD, M.Eng.
**　Graduate Student,Graduate School of Eng., Kenchiku Univ.
***　Prof. Graduate School of Eng., Kenchiku Univ., Dr.Eng.(※Adviser)

「かんかんがくがく作品」を求む――建築デザイン発表会早わかり

建築学会が秋に開く全国大会では、例年 5,000-6,000 題の研究論文が発表される。このため、「大会」イコール「論文発表」のイメージが強いが、2008 年 9 月の中国大会（広島大学）からは、大きく様変わりする可能性がある。新たに「建築デザイン発表会」が創設され、「作品発表」が加わるからだ。準備委員長の三井所清典氏（アルセッド建築研究所代表／芝浦工業大学名誉教授）に聞いた。

作品を議論し、評価したい

建築専門誌が作品を掲載する基準は、『新建築』や『GA JAPAN』なら「空間の感性」プラス「設計の論理性」、『建築技術』なら「技術的な工夫」、『日経アーキテクチュア』なら「空間の感性」プラス「社会的な意味合い」といったところだろうか。

――建築デザイン発表会ではどんな作品を期待しますか。

三井所――どうすれば建築学会らしさが出せるのかを、いろいろ考えました。建築学会の定款には、「この会は建築に関する学術・技術・芸術の進歩発達をはかることを目的とする」とあります。それに従うと、設計の論理性、技術的な裏付け、経済的な根拠、空間の感性などが明確に表れている作品、ということになります。

――建築学会が毎年発行する『作品選集』、あるいは学会賞（作品）や作品選奨では、『新建築』などと同じように「空間の感性」プラス「設計の論理性」が基準になっています。それとは異なりますか。

三井所――意匠だけでなく構造・環境・設備、建築単体だけでなく団地・まちづくり・景観、新築だけでなく保存・修復・復元、建築空間だけでなくインテリア・家具・ディテールなどと、幅広い分野の作品を対象にしています。したがって、自ずと基準が違ってきます。

――「建築デザイン発表会」という言葉には、感性重視のニュアンスがあります。しかし、話を聞くとそうでもないようです。「空間の感性」プラス「設計の論理性」の順番を逆転させて、「設計の論理性、技術的な裏付け、経済的な根拠」プラス「空間の感性」と言い換えたような感じですか。

三井所――発表会の目的は、作品を対象にして議論を交わし、評価しあうプロセスを通じて、設計行為に対する認識を深めていくことです。そうすると、「設計の論理性、技術的な裏付け、経済的な根拠」プラス「空間の感性」という順番の方が議論しやすい面があります。

私は「捨てられた作品」にも応募してほしいと思っています。チームで設計していると、結果として採用された案と捨てられた案とに分かれます。しかし、別の目で見ると、捨てられた案の方が高い評価を得る場合もあるでしょう。そこを議論したら面白いですよ。

――少しジャーナリスティックな表現になりますが、侃々諤々（かんかんがくがく）を招く作品を求めている、と理解させてもらいます。

研究室のプライドを刺激する作品

建築デザイン発表会の対象になる作品は、実施作品だけではなく、計画案、大学の卒業設計、大学院の設計課題なども含まれる。

応募部門は一般部門とテーマ部門の二部門に分かれている。このうちテーマ部門に関しては招待講評者が決められ、20 作品を限度にして講評が行われて『建築雑誌』2009 年 2 月号に掲載されるほか、1 割程度の作品が顕彰される。

2008 年度のテーマと招待講評者は、木造建築の可能性（稲山正弘）、デザインにおける構造の論理性と感性（川口衞）、環境の視点から（野沢正光）、水辺空間と都市デザイン（陣内秀信）となっている。

――大学生、大学院生にはどんな作品を期待しますか。

三井所――彼らを指導する先生、彼らが所属する研究室のプライドを刺激するような作品を見せてほしいですね。

教授、准教授の先生たちが、「建築デザイン発表会に作品を出そう」と激励し、論理がはっきりして、社会的に意味がある作品を設計するように指導してくれれば、大学生・大学院生もそれを目標にして努力してくれるはずです。

優れた作品を多く発表する研究室は知名度が上がり、大学・大学院に進学する学生たちの目標になるとも思います。

――作品が議論され、評価されることは、人間を成長させてくれる、と。

三井所――設計教育、設計の質の向上のためにも、多くの人の目に触れる機会を増やすことが大切です。

――社会人と大学生・大学院生を比較すると、どちらの応募が多いと予想しますか。

三井所――建築学会のネットワークを考えますと、教授、准教授の先生たちを通じて声をかけやすいので、とりあえずは大学生・大学院生が多いと思います。

――社会人はどうですか。

三井所――建築専門誌に掲載される作品数はページの都合で数が限られます。それに対して、建築学会はこの大会で会員 1 人に 1 作品を発表する権利としての場を提供します。有効に活用してもらえればと思います。

――提出された作品は審査されますか。

三井所――梗概の内容が著しく不十分なもの、商業宣伝に偏したもの、応募規程・執筆要領に反するものは採用されません。

――とすると、必要最低限の審査ですね。

三井所――建築学会は会員が業績を発表する権利を大切にしています。

―― 2006 年の日本地震学会の例ですが、新潟県中越地震、沖縄台湾地震、紀伊半島沖地震などの「予知に成功した」とする論文が発表されました。しかし、予知の根拠となる学術的な裏付けはいっさい示されないので、発表を聞く立場からすると迷惑千万でした。

「無意味な作品」が提出される恐れはありませんか。

三井所――建築学会が会員に開かれている以上、一定の割合でノイズが混じる可能性は否定できません。でも、きっと自浄作用が働きますよ。

建築学会の原点回帰

建築学会の大会で発表される研究論文を「ヒヨコ」とすると、大会の論文を数本まとめて『論文集』（黄表紙）に掲載された論文は「成鳥」に例えられる。黄表紙論文は学位（博士号）の取得、就職・昇任を目指すうえで大切な実績になる。その先にあるのは学会賞（論文）という栄光だ。

――建築デザイン発表会に提出された作品は、論文のように実績として認められていくでしょうか。

三井所――理想でいえば、『作品選集』、作品選奨、学会賞（作品）につながってほしいと思います。

　しかし、現在はやっとスタート地点に立った状態です。当面はうまく離陸して、毎年、少しずつ高度を上げて、安定飛行に移らなければなりません。そのためには、大変なエネルギーがいるでしょうね。

　つまり、実績として認められることは、将来の課題です。

――それにしても、今、なぜ建築デザイン発表会なのですか。

三井所――ひとつには、いわば原点回帰があります。建築学会は明治 19 年（1886 年）に造家学会としてスタートしました。当時の会員は欧米で学んだり、工部大学校（現・東京大学工学部）の卒業生だったりしたわけですが、彼らは近代建築を設計するために建築を学んだ人たちです。したがって、建築学会のテーマも個々の建物をどう設計し、施工するかということだったはずです。

しかし、その後、建築学会は「建築学」の研究に比重を移し、テーマも建築計画、構造、設備、構法・工法、建築史、都市計画などに専門化、

所在地 : 東京都港区芝 5-26-20
主な用途 : 事務所
敷地面積 :300m^2
建築面積 :200m^2
延床面積 :200m^2
キーワード : 事務所・省エネルギー・免震構造

Location : 5-26-20,Shiba,Minato-ku,Tokyo
Main Use : Office
Site Area : 300m^2
Building Floor Area :200m^2
Total Floor Area : 500m^2
Keywords : Office, Energy Conservation, Base Isolation

細分化されていきました。結果として、大会も「論文発表」が中心になりました。
専門化、細分化されすぎた「建築学」を見直すためにも、もう一度原点に帰って、「作品発表」を重視するべきではないか。そういう考え方があったと思います。
――ほかにも理由がありますか。
三井所――もうひとつは作品を発表する場を増やすためです。建築専門誌に掲載される作品はどうしても限られてしまいます。建築学会が場を提供することで、埋もれていた作品を発掘し、議論・評価することで設計を活性化させていきたい。学生と社会人が同席することで思わぬ展開の可能性もあるでしょう。それらのことが、巡り巡って建築学会の活性化につながることも期待しています。